

テーマ：少林寺拳法を始めてからの自分の変化について

ぼくは、少林寺拳法を始める前、苦手な事がありました。それは、感しゃの気持ちを伝える事と「あいさつ」をする事です。声に出して、すなおな自分の気持ちを家族にも、うまく伝えられませんでした。でも、少林寺拳法を始めてからは変わりました。お母さんかお父さんが、道場におくってくれた時に、「ありがとう」と言えるようになりました。それは、先生に「「ありがとう」と言うと、「ありがとう」と、言われた人の心がうれしくなる。」と、教えてもらったからです。ぼくも、「ありがとう」と言われると、うれしくなるので、感しゃする気持ちを、言葉に出して言う事は、とても大切だと思いました。「あいさつ」も、苦手でした。はずかしいし、自分に自信がなかったからです。「あいさつ」は、ものすごく大切です。なぜなら、人を元気づけるまほうの言葉だからです。「あいさつ」は、学校の道徳でも、勉強します。あいさつを言わない少年が、あいさつを言われ元気になり、自分も、あいさつを言えるようになる、というお話です。ぼくもあいさつは、「どうして言わなきゃいけないんだろう？」とっていました。「あいさつ」をされても、うまくこたえてあげられませんでした。でも、少林寺拳法を始めてから「あいさつ」をする理由が分かりました。それは、「あいさつ」を言うと、言われた人を元気づける。そして、「あいさつ」を言うと、言われた人も返してくれて、自分もうれしい気持ちになって元気になるからです。ぼくは、自分から進んで「あいさつ」が言えるとうになりました。もうひとつ、少林寺拳法を通してできるようになった事があります。それは、「人を信じる事」です。少林寺拳法は相手を見とめ、信らいしなければ成り立ちません。助け合い協力し合う事が大切です。少林寺拳法の六つのとくちょうの一つに「組手主体」（協力し合って上達する）があります。少林寺拳法では、この「組手主体」を中心に練習します。2人で練習する事で、共に感しゃの気持ち（ありがとう）を持って行ける事ができます。「組手主体」を成立させるには、「あいさつ」と「相手を信じる心」がなければ、不可能だからです。この「ありがとう」（感しゃを伝える）に「あいさつ」（人を元気づけるまほうの言葉）、「相手を信じる心」（組手主体）を持つ事で、ぼくの心が変わりました。自分に自信が生まれ、積極的に物事に取り組む事ができるようになりました。自分から周りの人達に「友達になろう」と言えるようになって、みんながぼくの事を信じてくれるようになりました。そしてぼくもみんなを信じることで、お願いを聞きあえる友達がたくさんできました。そしてぼくが変わった事で、周りの人達が明るくなりました。ぼくはこれからさらに、この3つの事だけではなく、みんなのお手本になる人間になりたいです。先生は、「学科やろん文は、書く事が目的ではなく、読んだ人が感動して元気をもらってうれしくなって「がんばろう」という気持ちになる事が大切」と、教えてくれました。ぼくのろん文や学科を読んでもらった人が感動してくれて、元気ももらい、「がんばろう」と思ってくれるような文章を書きたいです。みんながよろこんでくれるような文章を書けるようになるのがゆめです。このろん文を読んでもらった人が、感動し、元気になり、「がんばろう」と思ってくれるために、ぼくが少林寺拳法を始めて変わる事ができた事を書きます。あきらめない事は「すごく大切」です。ぼくもまだまだがんばります。みなさんもがんばってほしいです。